

IN MOTION

WOMEN  
IN MOTION

WOMEN  
IN MOTION

DOSSIER DE PRESSE

PRESS KIT

2022

## 目次

---

「ウーマン・イン・モーション」とは

---

年表

---

2021年と2022年－  
映画界における女性の  
地位が転機を迎える？

---

カルラ・シモン  
新たな視点

---

未だ過小評価が続く  
映画界の女性技術者たち

---

ケリングと女性

---

統計データ

---

お問い合わせ先



# WOMEN IN MOTION

## 文化・芸術の世界で活躍する女性たちに 光を当てるプログラム

2015年、ケリングはカンヌ国際映画祭にて、映画界の表舞台そしてその裏側で活躍する女性たちに光を当てることを目的とし、「ウーマン・イン・モーション」を発足しました。以来、このプログラムは写真を始め、アート、デザイン、音楽、ダンスの分野にも活動を広げています。クリエイティビティこそが変革を生み出す最も強い力の一つであるものの、依然として男女間の不平等が顕著である芸術や文化の世界に「ウーマン・イン・モーション」は取り組んでいます。

「ウーマン・イン・モーション」アワードでは、各分野で活躍する、インスピレーションを与えた人物や才能ある若手女性たちを表彰しています。また、トークイベントでは、著名人がそれぞれの職業における女性の立場について意見を交換する機会を提供しています。

過去8年間、「ウーマン・イン・モーション」は芸術分野の全ての領域における女性の地位や受ける評価について、人々の考え方を換え、地位と評価の両方で理念を掲げ、解決していくためのプラットフォームとして選ばれてきました。

平等までの道のりはまだ長く、さらなる意識変革が求められています。



# WOMEN IN MOTION

【概要】

2015年以來、  
「ウーマン・イン・モーション」は  
8つの文化的分野で実施：映画、写真、音楽、ダンス、  
文学、ファインアート、アニメ、デザイン

人々に感銘を与える**10人の著名人**が  
カンヌとアルルで  
「ウーマン・イン・モーション」アワードを受賞

**13人の才能ある若手女性**をサポート  
カンヌで8つのヤング・タレント・アワード授与と資金援助、  
アルルと中国・廈門で

7つのマダム・フィガロ・フォトグラフィー・アワード授与

「ウーマン・イン・モーション」ラボを設立し、  
写真史における女性に関する**研究を支援**

世界で**100回以上のトーク、イベント**を実施  
**21話のポッドキャスト**を収録



# WOMEN IN MOTION 2015



ジェーン・フォンダ、フランソワ=アソリ・ピノー、サルマ・ハエック、ジェイク・ギレンホール | ミーガン・エリソン

## カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞：ジェーン・フォンダ  
スペシャル・アワード受賞：ミーガン・エリソン

## カンヌ国際映画祭

第1回目の「ウーマン・イン・モーション」：  
イザベラ・ロッセリーニと  
クロディ・オサールによるトーク



カンヌ国際映画祭  
ライナー・アパーギル、インバル・レスナー、  
レスリー・ウドウィン、ドゥニズ・  
ガムゼ・エルグヴァンによるトーク

Credit | Venturilli - Vittorio Zunino Celotto - Buckner

カンヌ国際映画祭  
サルマ・ハエックと  
マティアス・スーナールツによるトーク



カンヌ国際映画祭  
クレール・ドゥニ、  
リウ・シュウ、  
リャン・イン  
によるトーク

カンヌ国際映画祭  
クリスティーン・  
ヴェイコンと  
エリザベス・カールセン  
によるトーク

カンヌ国際映画祭  
フランシス・マクドマンドによるトーク



Credit | Andreas Rentz/Getty Images - Vittorio Zunino Celotto - Alison Cohen Rosa

カンヌ国際映画祭  
レベッカ・ズロトヴスキと  
メルヴィル・ブポーによるトーク

カンヌ国際映画祭  
イザベル・ユベールと  
シルヴィー・ピアラによるトーク

カンヌ国際映画祭  
ゴルシフテ・ファラハニと  
アンヌ=ドミニク・トゥーサンによるトーク



カンヌ国際映画祭  
ティエリー・フレモーによるトーク



カンヌ国際映画祭  
アニエス・ヴァルダによるトーク



# WOMEN IN MOTION 2016



スーザン・サランドン、ジーナ・デイヴィス | レイラ・ブジド、ガヤ・ジジ、アイダ・パナハンデ



## カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞：ジーナ・デイヴィスとスーザン・サランドン  
ヤング・タレント・アワード受賞：レイラ・ブジド、ガヤ・ジジ、アイダ・パナハンデ

## カンヌ国際映画祭

ケリー・バトナム、セリーヌ・ラトレイ、  
レナ・ロンソンによるトーク



## カンヌ国際映画祭

クロエ・セヴィニーとエイミー・エメリッヒ  
によるトーク



## カンヌ国際映画祭

キアラ・ティレシ、ジュリエット・ピノシュ、  
パトリア・リゲン、マリアンヌ・スロによるトーク

## カンヌ国際映画祭

ジーナ・デイヴィスとスーザン・サランドン  
によるトーク

Credit | Venturilli - Vittorio Zunino Celotto - Buckner



カンヌ国際映画祭  
リサ・アズエロス、  
スー=メイ・トンブソン、  
ザイナブ・サルビ、  
サルマ・ハエック  
によるトーク

## カンヌ国際映画祭

クリス・リーによるトーク



## カンヌ国際映画祭

ジョディ・フォスターによるトーク



## カンヌ国際映画祭

アリス・ウィンクール、  
ウーダ・ベニャミナ、  
ゲー・ウェイによるトーク



## カンヌ国際映画祭

フランシーヌ・ラヴネとメリッサ・シルバースタインによるトーク



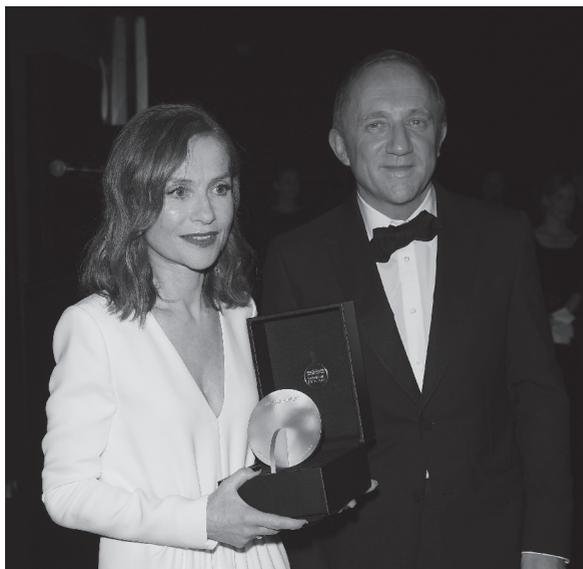
フランス・アルル  
アルル国際写真  
フェスティバル  
マダム・フィガロ・  
フォトグラフィー・  
アワードをライア・  
アブリルが受賞

アメリカ・ニューヨーク  
サンダンス・  
インスティテュートにて  
ヘザー・レイ、  
アリックス・マディガン、  
リディア・ティーン・  
ピルチャーによるトーク



Credit | Vittorio Zunino Celotto

# WOMEN IN MOTION 2017



イザベル・ユベール、フランソワ=アンリ・ピノー | マイサルーン・ハムード

## カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞：イザベル・ユベール  
ヤング・タレント・アワード受賞：マイサルーン・ハムード



カンヌ国際映画祭  
ロビン・ライトによるトーク

## カンヌ国際映画祭 ヤン・ヤンによるトーク



カンヌ国際映画祭  
イザベル・ユベールによるトーク

Credit | Jonathan Bloom - Venturieri - Vittorio Zunino Celotto



カンヌ国際映画祭  
サルマ・ハエック、コスタ=ガヴラス、  
カウテール・ベン・ハニアによるトーク

## カンヌ国際映画祭 ダイアン・クルーガーによるトーク



## 中国・上海

エル・アクティヴにてアレキサンドラ・スン、  
イエン・ピンイエン、ホアン・ルーによるトーク

## 日本・東京

エル・ウーマン・イン・  
ソサエティにて  
河瀬直美による  
トーク



## 日本・東京

イザベル・ユベールと是枝裕和によるトーク

## フランス・アルル

アルル国際写真フェスティバル  
マダム・フィガロ・フォトグラフィー・アワードを  
バズ・エラスリスが受賞



## 中国・廈門

ジー・メイ×アルル国際写真フェスティバル  
マダム・フィガロ・ウーマン・フォトグラファー・アワード  
をグオ・イングアンが受賞

Credit | Vittorio Zunino Celotto - Jeremie Souteyrat - Francois Goze

## アメリカ・ニューヨーク

ケリー・パトナム司会のもとマイサルーン・ハムードと  
デブラ・グラニックによるトーク



フランス・パリ  
ケリング本社  
ラエネックにて  
アニエス・ヴァルダの  
米アカデミー名誉賞を  
祝した記念トーク

# WOMEN IN MOTION 2018



フランソワ=アンリ・ピノー、パティ・ジェンキンス | カルラ・シモン

## カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞: パティ・ジェンキンス  
ヤング・タレント・アワード受賞: カルラ・シモン



## カンヌ国際映画祭

キャリー・マリガンによるトーク



## カンヌ国際映画祭

サルマ・ハエック=ピノーによるトーク

## カンヌ国際映画祭

Z.TAO、クリス・リー、  
ヴィヴィアン・チュイによるトーク

## カンヌ国際映画祭

エミリア・クラークによる  
トーク



## カンヌ国際映画祭

アイサ・マイガによる  
トーク

## スイス・ローザンヌ

### ローザンヌ映画祭

ロッシ・デ・パルマによるトーク



## アメリカ・

### ソルトレイクシティ

### サンダンス映画祭

ローラ・リスターと  
ジェニファー・フォックス  
によるトーク



## フランス・パリ

アニエス・ヴェルダによるトーク



## 日本・東京

エル・ウーマン・イン・  
ソサエティにて  
夏木マリによるトーク

## フランス・パリ

「ヌーヴェル・ヴァーグから  
現代までのフランス人女性映画  
クリエイターの役割」を  
テーマにしたセミナーを実施



## フランス・アルル

### アルル写真フェスティバル

マダム・フィガロ・  
フォトグラフィー・アワードを  
ヴィクトリア・ヴォイチェホヴスカが  
受賞

## 中国・廈門

### ジューメイ×アルル国際写真

### フェスティバル

マダム・フィガロ・フォトグラフィー・  
アワードをピクシー・リャオが受賞



## フランス・パリ

### シネマテーク・フランセーズ

ジェーン・フォンダによるトーク

Credit | Anthony Ghmassia - Vittorio Zunino Celotto

Credit | Olivier Borde - Vittorio Zunino Celotto - Anthony Ghmassia - Julien de Rosa

# WOMEN IN MOTION 2019



コン・リー、フランソワ=アンリ・ピノー | エヴァ・トロピッシュ



## カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞：コン・リー  
ヤング・タレント・アワード受賞：エヴァ・トロピッシュ

## カンヌ国際映画祭

ナディーン・ラバキー  
によるトーク



カンヌ国際映画祭  
エヴァ・ロンゴリア  
によるトーク

## カンヌ国際映画祭

チョウ・ドンユイ  
によるトーク



カンヌ国際映画祭  
レイナ・ブルーム  
によるトーク

## カンヌ国際映画祭

ステイシー・L. スミス、  
クラウディア・エアー、  
マイケル・バーカー、  
カースティン・ベンソン、  
ジャクリン・コーリー、  
アニタ・ゴウによる  
ラウンドテーブル・ディスカッション



## フランス・パリ&アルル

アルル国際写真フェスティバルとの  
パートナーシップを発表  
「ウーマン・イン・モーション」の  
写真部門および  
「ウーマン・イン・モーション」ラボを設立

## フランス・パリ

パリ国立高等美術学校の  
フェスティバル・ドートンヌ・ア・パリで  
開催されたアンナ・ボギギアの  
展覧会を支援



## スイス・ローザンヌ

ローザンヌ映画祭  
レイラ・スリマニによるトーク



## フランス・アルル

マダム・フィガロ・フォトグラフィー・アワード  
をエヴァンゲリア・クラニョッティが受賞



## 中国・上海

上海国際映画祭  
チャオ・タオによるトーク

## アルル国際写真フェスティバル

「ウーマン・イン・モーション」  
フォトグラフィー・アワード&トーク  
スーザン・マイゼラス

## アメリカ・ニューヨーク

ファイドン社との提携により、  
アメリカおよびフランスでの『Great Women Artists』の  
出版を開始

## 日本・東京

東京国際映画祭  
寺島しのぶ、蜷川実花、スプツニ子!によるトーク

# WOMEN IN MOTION 2020



スーザン・サランドン、ジーナ・デイヴィス

アメリカ・ニューヨーク

『テルマ&ルイーズ』特別上映会

主催：ジーナ・デイヴィス、スーザン・サランドン



コロナ危機のため

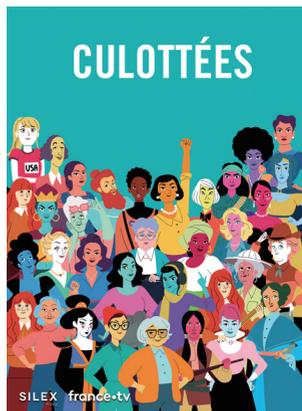
多くのイベントが開催中止となる中  
ケリングとカンヌ国際映画祭は  
ヤング・タレント・アワードを継続し  
マウラ・デルベロが受賞

フランス・パリ

「レ・フィユ・ドゥ・ラ・フォト」が  
実施した写真における男女平等に関する  
調査の一般公開を支援

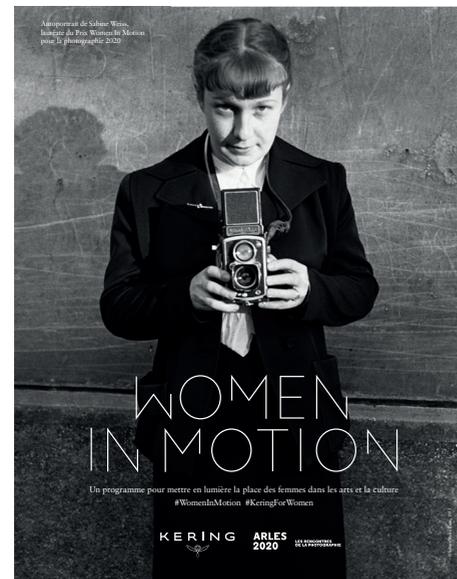
フランス・パリ

グラフィックノベル  
『Brazen: Rebel Ladies  
Who Rocked the World』  
のTVアニメ化を支援



Credit | Neil Rasmus/BFA.com - Silex Film - Getty Images

Credit | Yuiaka Iwata - Sabine Weiss, Paris, 1953



フランス・パリ

アルル国際写真フェスティバル

「ウーマン・イン・モーション」フォトグラフィー・  
アワードをサビーヌ・ヴァイスが受賞

日本・東京

河瀬直美、永作博美、  
井浦新によるトーク

フランス・パリ

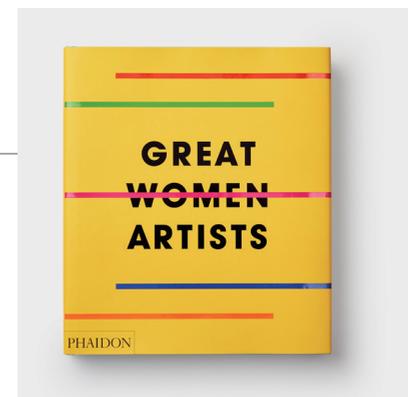
フィルム・デュ・カメラアが  
配給する  
アイダ・ルピノの  
回顧上映を支援



フランス・パリ

「ウーマン・イン・モーション」ラボの  
第1弾の支援を受け、書籍

『Une histoire mondiale des femmes photographes』を発売



アメリカ・ロサンゼルス

ケリング、ファイドン、クリスティーズが  
書籍『Great Women Artists』の出版を記念



フランス・パリ

国際的アートフェア「パリ・フォト」と  
「Elles X パリ・フォト」展を支援

# WOMEN IN MOTION 2021



カンヌ国際映画祭  
「ウーマン・イン・モーション」  
アワード受賞：  
サルマ・ハエック  
ヤング・タレント・アワード受賞：  
シャノン・マーフィ

シャノン・マーフィ、サルマ・ハエック、マウラ・デルベロ

## カンヌ国際映画祭

ティルダ・スウィントンによるトーク



## カンヌ国際映画祭

ジョディ・ターナー＝スミスによるトーク



## カンヌ国際映画祭

ルー・ドワイヨンによるトーク



## カンヌ国際映画祭

ヤミナ・ベンギギによるトーク



## カンヌ国際映画祭

レジーナ・キングによるトーク

Credit | Vittorio Zunino Celotto



## フランス・アルル

### アルル国際写真フェスティバル

「ウーマン・イン・モーション」  
フォトグラフィー・アワード受賞およびトーク：  
リズ・ジョンソン・アルトゥール

## バーチャル・ディスカッション

『プロミシング・ヤング・ウーマン』  
キャリー・マリガン、  
エメラルド・フェネル、アンジー・ウェルズ、  
ナンシー・スタイナー

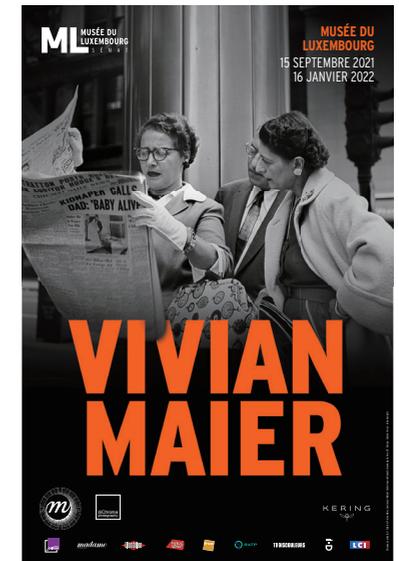


Credit | State of Vivian Maier, Courtesy of Maloof Collection and Howard Greenberg Gallery, NY, Marguerite Bornhauser/Liz Johnson Artur Eymar Guibarra



## フランス・アルル

マダム・フィガロ・フォトグラフィー・  
アワード受賞：イーサー・グバラ



## フランス・パリ

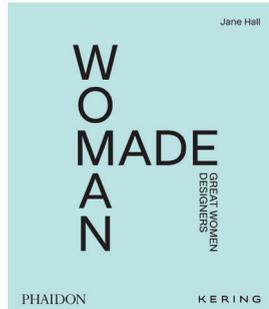
リュクサンブール美術館  
ヴィヴィアン・マイヤーの回顧展を支援

## 日本・京都

### KYOTOGRAPHIE

写真展「MEP Studio (ヨーロッパ写真美術館) による  
5人の女性アーティスト展 —  
フランスにおける写真と映像の新たな見地」を支援

フランス・  
ロシュフォール  
スール・ジュメル・  
フェスティバル  
ヤエル・ナーム  
によるトーク

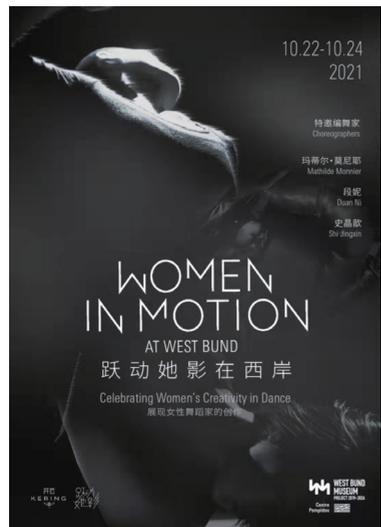


アメリカ・ニューヨーク  
ファイドン社と提携し  
書籍『Woman Made :  
Great Women Designers』を  
アメリカとフランスで発売



「ウーマン・イン・モーション」X  
ボメラートトーク & ポッドキャスト  
ジェーン・フォンダと  
ジャミーラ・ジャミルによるトーク

日本・東京  
『T JAPAN』にて  
日本人女性  
写真家特集した  
「ウーマン・イン・  
モーション」の  
連載を掲載



中国・上海  
女性のダンスや  
振り付けに関連する  
「ボンビドゥーセンター X  
ウェストバンド・  
ミュージアム・プロジェクト」  
と提携し  
「ウーマン・イン・モーション・  
アット・ウェストバンド」  
を開催



フランス・パリ  
「パリ・フォト」  
アートフェアおよび  
「Elles x パリ・フォト」  
を支援

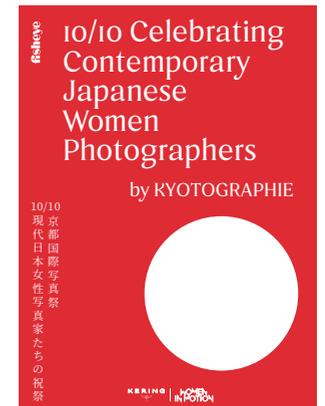
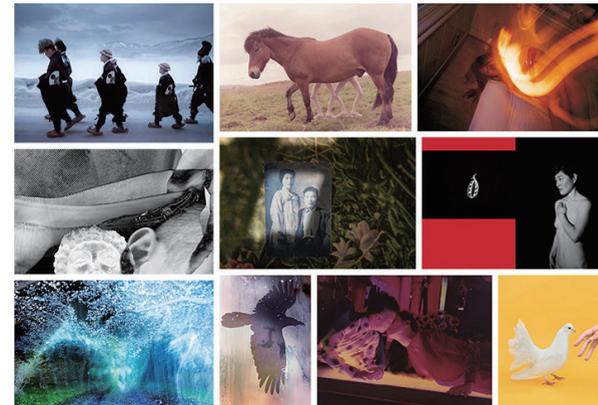
アメリカ・マイアミ  
ケリング、ファイドン、クリスティーズ、セント・ヘロンが書籍  
『Woman Made : Great Women Designers』発売を祝賀

Credit | State of Vivian Maier, Courtesy of Maloof Collection and Howard Greenberg Gallery, NY  
Yukari Chikura - Noriko Hayashi - Mayumi Hosokura - Atiko Inaoka - Ai Iwane - Momo Okabe - Harumi Shimizu - Mayumi Suzuki - Hideka Tomomura - Tamaki Yoshida

# WOMEN IN MOTION 2022



イタリア・トリノ  
トリノ王宮で開催のヴィヴィアン・マイヤーの回顧展を支援



日本・京都  
KYOTOGRAPHIE とのパートナーシップにより  
写真展「10/10 現代日本女性写真家たちの祝祭」を支援

フランス・パリ  
アリス・ギイに関するドキュメンタリー番組を支援



ティエリー・フレモー、ニンジャ・サイバーク、ヴィオラ・デイヴィス、フランソワ=アンリ・ピノー

カンヌ国際映画祭

「ウーマン・イン・モーション」アワード受賞：ヴィオラ・デイヴィス  
 ヤング・タレント・アワード受賞：ニンジャ・サイバーク



カンヌ国際映画祭

クララ・ルチアーニによる  
 トーク

カンヌ国際映画祭

メラニー・ロランによる  
 トーク



カンヌ国際映画祭

ヴィオラ・デイヴィスによる  
 トーク

Credit | Vittorio Zunino Celotto



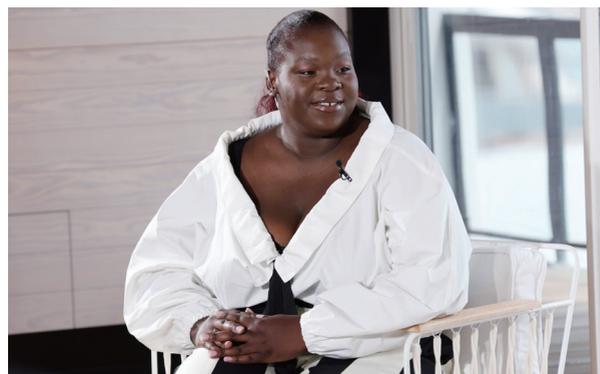
カンヌ国際映画祭

ライリー・キーオとジーナ・ギャメルによるトーク



カンヌ国際映画祭

エミリー・ヤングによるトーク



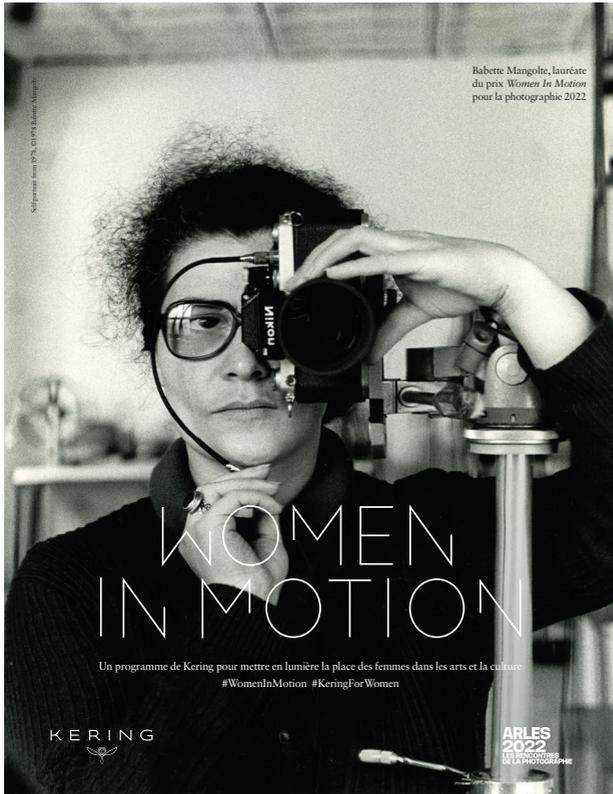
カンヌ国際映画祭

デボラ・ルクムエナによるトーク

Credit | Vittorio Zunino Celotto

ポッドキャスト



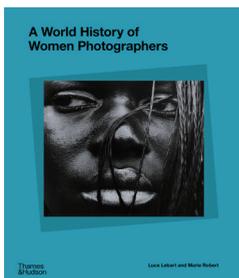


#### アルル国際写真フェスティバル

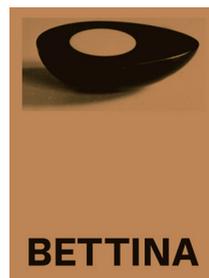
「ウーマン・イン・モーション」フォトグラフィー・アワード受賞：  
バベット・マンガルト

フランス・アルル  
アルル国際写真フェスティバル  
マルタ・ジェンティルッチと  
第1回  
「ウーマン・イン・モーション」  
フォトグラフィー・  
アワード(2019年)の  
受賞者である  
スーザン・マイゼラスによる  
「Cartographies du corps」展  
を支援

フランス・アヴィニョン  
アヴィニョン演劇祭  
ノエミ・グーダルと  
マエル・ボエジーによる  
パフォーマンス  
「アニマ」を支援



フランス・アルル  
第1弾「ウーマン・イン・モーション」  
ラボの一環として、  
書籍『A World History of Women  
Photographers』の出版を支援



フランス・アルル  
アルル国際写真フェスティバル  
第2弾「ウーマン・イン・モーション」ラボの一環として、  
「Bettina. A poem of perpetual renewal」展  
および書籍『Bettina』の出版を支援

# 2021年と2022年— 映画界における女性の地位が 転機を迎える？

---

ここ数年にわたり、映画界における女性の地位向上には確かな変化が見られます。しかしながら、女性や女性に関する出来事が男性と同じように扱われるためには、男女平等の闘いに勝たなければならない領域がまだ存在します。男女平等はもはや特別ではなく、当たり前のこととなるのです。

2021年7月17日。フランス人監督のジュリア・デュクルノーはカンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞しました。これは女性映画監督として史上2人目となる快挙で、ジェーン・カンピオンが『ピアノ・レッスン』で同賞を受賞して以来、28年ぶりのことでした。デュクルノーが手掛けた『TITANE / チタン』は映画とジェンダーにまつわる問題を新たな限界まで追求しており、デュクルノーが選ばれたということは極めて重要な意味を持っていると言えます。デュクルノーは審査員長のスパイク・リーに「この賞は私たちがよりインクルーシブで流動性の高い世界を、切実に必要としていることを認めてくれた証であり、心から感謝したいと思います。また映画において、そして私たちが人生で経験することの中に、より広い多様性を模索してくださっていることについても謝意を表したいと思います」と述べました。カンヌ国際映画祭は1年以上前から、他の映画祭と共にインクルーシブな映画界の必要性を認識してきました。

ニュージーランドの偉大な映画監督ジェーン・カンピオンは、壮大な西部劇『パワー・オブ・ザ・ドッグ』で世界の映画祭を総なめにし、昨年のヴェネチア国際映画祭銀獅子賞（監督賞）、リヨン・リュミエール映画祭リュミエール賞に続き、2022年には

アカデミー賞監督賞と英国アカデミー賞監督賞、作品賞を受賞しました。また、フランス人の女性映画監督クレール・ドゥニは、パワフルなドラマ『Both Sides of the Blade (英題)』で2022年ベルリン国際映画祭の銀熊賞（監督賞）を受賞。さらに同映画祭では2018年に「ウーマン・イン・モーション」ヤング・タレント・アワードを受賞したスペイン人のカルラ・シモン監督が金熊賞を受賞しました。もうひとつの輝かしい勝利はオードレイ・ディヴァンが勝ち取ったもので、1960年代を舞台に当時違法だった中絶を題材にしたアニー・エルノーの自伝的小説を親密、感覚的に、且つ心をつかむ形で映画化した『あのこと』で、2021年ヴェネチア映画祭金獅子賞を受賞しました。ディヴァンは映画祭で「この映画は怒り、そして切望を抱えながら作りました」と語りました。「私が全身全霊をかけて作り上げた作品です。…アンヌをただ傍観するのではなく、彼女の側に寄り添い、この若い女性が感じたことを感じて欲しかった。この賞のおかげで、男性であろうと女性であろうと、それが可能であることがわかりました」。ディヴァンが受賞したその日、韓国人のポン・ジュノ率いるヴェネチア映画祭審査員団は、特異な体験をユニークな映画表現を用いて表した作り手の決意、献身、知性を評価したのです。

しかしながら、皮肉な見方をする一部の人は、女性映画監督に与えられているこうした評価は、最近人目を引いているキャンペーンがもたらしたものに過ぎず、映画賞が流行りのムーブメントにすり寄った結果に過ぎないと言います。クロエ・ジャオは『マダム・フィガロ』誌のインタビューで、『ノマドランド』が2021年にアカデミー賞の作品賞と監督賞を受賞したことについて、その正当性を説明しなければならないこともあったと語っています。「私は毎日、自分に言い聞かせなければなりません。『優しくあれ、そしてオープンであれ』と。私たちの業界では、女性はたくましくなるか、人との関わりを避けるか、あるいは力のある多くの男性たちと同じように振る舞い、生来持っている感受性を鈍らせる方が生きていきやすい。女性として生きることが弱点とみなされることが、あまりにも多いのです。でも、私は自分らしくありたいし、敵にも味方にも自分の弱さを見せることができる自分でいたい。だって、ストーリー



テラーとして、それができなくなったら終わりですから。性別を理由に否定されることと、常に戦っているのです。『エターナルズ』で4億200万ドルの興行収入を達成し、2021年の世界興行収入ランキング第11位に入ったジャオに自分自身を正当化する必要などあるのでしょうか。2018年にカンヌで「ウーマン・イン・モーション」アワードを受賞したパティ・ジェンキンスが手掛けた『ワンダーウーマン』が大ヒットして以来、アメリカで予算の大きな映画を任される女性監督が増えたことは近年の進歩の一つと言えるでしょう。そして女性監督が手掛けたこれらの作品は、大成功を収めています。キャシー・ヤンが監督を務め、マーゴット・ロビー演じるアンチヒロインのハーレイ・クインが主人公の『ハーレイ・クインの華麗なる覚醒 BIRDS OF PREY』は2020年の世界興行収入ランキングで第11位を獲得しました。スーパーヒーローやスーパーヒロインが登場する映画であれ、アート系の映画であれ、女性は確実に前へと進んでいるのです。

とはいえ、その先にはまだ長い道のりが続いています。失われた数十年間を一日、二日で埋め合わせることはできず、またパンデミック以降は女性やマイノリティの地位に関わる問題よりも、映画産業の存続そのものに関心が集まっています。しかし、これらの問題は密接に関連しています。

女性映画監督はこれまで見過ごされがちだったストーリーや視点を大スクリーンに映し出すことで、映画館に新たな観客を呼び込むことができます。もしかしたら、パンデミック後に人々を映画館に呼び戻すひとつの方法にもなるかもしれません...実際にその機会が与えられたなら、という条件付きですが。なぜなら、映画界に関わる女性についての統計は、すべてが希望に満ち溢れているとは言えないからです。フランス国立映画映像センター(CNC)の最新の調査によると、2020年に女性監督が制作したフランス映画は全体のわずか24%に過ぎません。#MeToo運動や言論の自由、あるいは男女平等を支援するCNCの助成金をもってしても事態は何も変わっておらず、女性映画監督の割合は2011年からほとんど変わっていないのです。そして、47年の歴

史を誇るセザール賞を受賞した女性監督は、『エステサロン/ヴィーナス・ビューティ』を監督したトニー・マーシャルただ一人です。

また、映画の中で表現される多様性は依然として不十分であり、満足のいくものではありません。民族的出身、文化、障害、体重、体格、性自認、年齢といった要素がいまだに面白おかしく表現され、人々に烙印を押すことがあまりにも多いのです。

2022年のサンダンス映画祭で、イギリス人の女優、脚本家、プロデューサーであるエマ・トンプソンが『Good Luck to You, Leo Grande (原題)』のヌードシーンについて語りました。オーストラリア人のソフィー・ハイドが監督したこの作品で、トンプソンはセックスワーカーによって性的な喜びを再発見する未亡人の役を演じています。「私たちは、美しく加工されていない肉体の映像を見ることに慣れていません。ですが彼女は2人の子供を産んだ62歳の女性であり、そういう体型をしているはずです...私たちを取り巻くすべてが、自分たちがいかに不完全で、すべてが、間違っているのかを突きつけます。これは20世紀と21世紀における女性の身体の大きな悲劇であり、私たちが絶対に変えなければならない物語なのです」

映画界には、人と人との違いを当たり前のものであるとして受け入れ、また深く根付いた家父長制的な文化を解体することで、人々の考え方や視点を変え、長期的には未来の映画監督が選択する地位を変える力があります。

「ウーマン・イン・モーション」は、2015年からこうした問題のすべてを受け止め、受け入れてきました。このプログラムは、映画界の第一人者や新進気鋭の若手たちを対象に、他者性の価値を強調し、経験を共有し、そして何よりクリエイターとしての仕事について語るためのプラットフォームを提供しています。そうすることで、彼らは人々を集め、変化を促し、新しいアプローチを提示することができるのです。



# カルラ・シモン 新たな視点



初監督作品『悲しみに、こんにちは』で2018年「ウーマン・イン・モーション」ヤング・タレント・アワードを受賞し、2022年2月には2作目『アルカラス（原題）』でベルリン国際映画祭金熊賞を受賞したスペイン人監督のカルラ・シモン。早くも光輝く彼女のキャリアを振り返りましょう。

10代の頃はジャーナリストになりたいと考えていたカルラ・シモンでしたが、高校に入り、教師からオーストリア人の映画監督ミハエル・ハネケが手掛けた『コード・アンノウン』を教えられました。「この作品について授業で何度も話し合い、映画作品にはスクリーンで見る以上のものが詰まっていること、つまり自分を表現し、自分の信じるもののために立ち上がる素晴らしい機会があることに気づいたのです」。こ

のような気づきを経て、シモンはバルセロナ自治大学の文化・コミュニケーションコースに進み、その後、カリフォルニアと英国に滞在して4本の短編映画を制作しました。さらに2本の短編映画を作った後、2017年に初の長編映画『悲しみに、こんにちは』を完成させ、大きな飛躍を遂げました。このデビュー作は、6歳の少女が母親の死後、山麓に住む叔父と暮らす様子を描いた繊細でデリケートな作品でした。この自伝的な物語は世界中で反響を呼び、2017年のベルリン国際映画祭で最優秀新人作品賞を受賞、さらにその1年後には「ウーマン・イン・モーション」のヤング・タレント・アワードとそれに伴う5万ユーロの助成金による支援を受けることになったのです。

このような支援と注目の両方を受けることにより、シモンは自信を得ただけでなく、2作目の長編映画『アルカラス』を製作するために必要な資金も獲得できました。「『悲しみに、こんにちは』の後、私はある種のプレッシャーを感じていました。当時、頭の中には制作のアイデアが2つありましたが、最終的には1作目から最も遠い内容のものを選びました。同じことを繰り返さないというだけでなく、自分自身に新たな挑戦を課すためです。こうして制作したのが、プロの俳優ではない人たちを演出した群像劇でした」。『アルカラス』は、80年にわたり労苦と愛情を注いできた土地を追われることになり、最後の収穫を行う農家を題材としています。「この映画は前作ほど自分の体験に近いものではありませんが、私の叔父はこの作品の舞台となった地方で桃畑を営んでいます。映画のストーリーは彼個人の話ではありませんが、何世代にもわたって畑仕事をしてきた農家がつつましい生活すらできず、農場を去らなければならない現実を私はよく知っています。地球の存続が危ぶまれている今、環境を大切にすることをしている人たちを支援することは、本当に大事なことだと思っています」

物語を伝えたいという欲求は今もシモン監督のモチベーションの源泉となっていますが、カタルーニャ出身の彼女にとって、映画制作は政治的な行為でもあります。「私



## 未だ過小評価が続く 映画界の女性技術者たち

は基本的に登場人物の人柄に目を向けていますが、観客が彼らに共感すれば、不公平に対する非難の声を上げてくれるかもしれません。私は『アルカラス』を通じて、忘れられた人々や地域に、声や顔、イメージを与えたかったのです。シモンのメッセージは確かに大きな声となって、明確に届いています。今年、カルラ・シモンはベルリン国際映画祭から最高の栄誉を受けました。同映画祭は、彼女が常に尊敬するクレール・ドゥニ監督にも賞を授与しています。「ドゥニの個性、登場人物の奥深さ、美的センスに関するアプローチはすばらしいと思います。彼女は、ルクレシア・マルテルやアニエス・ヴァルダ、セリーヌ・シアマや、傑作『ウェスタン』を監督したドイツのヴァレスカ・グリーゼバッハと同じように、女性監督のあり方を変えてきたのです」

女性であることがキャリアの妨げとなったことは一度もないとはいえ、映画界における女性の地位向上が大きな問題となっている今、自分がそれを打破してきたことは自覚している、とシモンは言います。「『悲しみに、こんにちは』を制作している時に、私がどういうやり方で準備したいか、あるいは撮影をリードしたいかをスタッフに受け入れてもらう必要があった、というのはあるかもしれませんが、それ以外に、性別のせいでは何か問題が起きたことはありません。当時は時々『こんなの知らない』と言って物事を考え直さなければならぬことがありましたが、チームの中にはそれを私の能力不足だととらえる男性もいました。ですが、疑問は創造的なプロセスの一部であり、男性の映画監督の中にもそれを受け入れたい人、男性が苦しみがちな効率や権威といったものへの期待から自分を解放したいと願っている人もいることでしょう」

1作目、そして2作目の成功はカルラ・シモンのアプローチ、願望、信念に対する疑念を確実に晴らしており、これを受けてすでに3作目の準備が進められています。

女性の地位向上に変化をもたらし、新しい働き方を生み出し、不適切な行為に終止符を打つためには、映画界の技術職もまた、自己改革に取り組む必要があります。この分野で働く女性たちがキャリアアップに向けてより良い機会を得るべき時が来ているのです。

自立した若い女性2人の友情を描いたフェミニズムの物語で、2018年にケリングの支援によりレストア版が公開されたアニエス・ヴァルダ監督の『歌う女・歌わない女』は、その内容以上に作り方も社会運動的な作品でした。この偉大なフランス人監督は1976年にこの映画を制作した際、撮影チームの男女比のバランスをとると共に、ヌリト・アヴィヴがフランス初の女性撮影監督としてフランス国立映画映像センター(CNC)から認定証を得られるよう取り計らったのです。ただ、これは当時、大変画期的なことでしたが、業界を大きく変えるきっかけにはなりませんでした。

残念ながら、46年経った今も映画スタッフの中で女性は非常に少数派です。CNCの発表によると、フランスで男女比がほぼ同じなのは映像編集と助監督のみで、それぞれ45.6%と55.9%が女性であることが分かっています。一方、女性の占める割合は舞台係が4.2%、電気技師は8.6%、音響技師も12.4%に過ぎません。CNCは出資した映画に対し、制作チームのさまざまな部門におけるディレクターの男女比のバランスがとれていれば15%の割増金を出すとしており、これを踏まえればなおさら驚愕せざるを得ない数字と言えるでしょう。状況はアメリカでも同じで、テレビ・映画界女性研究センター(Center for the Study of Women in Television and Film)の調査によると、2019年の興行収入上位250作品のうち、女性の撮影監督は5%、特撮監督では4%しかいません。さらに付け加えるなら、女性の給与は体系的に男性の同僚の水準を下回っています。この正当な理由のない不均衡に加え、機会の欠如や撮影現場の雰囲気から、女性がスキルや能力を持っていても転職を決意せざるを得ないのが現状です。



映画の撮影現場では、一部の職種で使われているような重い機材を女性は運ぶことができない、といった固定観念が根付いています。また、女性が関わるのは不本意ながらも比較的予算の映画に限られているため、超大作映画の部門全体を管理する心構えができていないと見なされています。その一方で、女性は世話好きで、整理整頓が上手く、きちんとしていて几帳面な性格である、というステレオタイプがある結果、メイクやヘアスタイリスト、衣装、アシスタント、あるいは伝統的に女性にあてがわれてきたスクリプターといった職務に携わるのが理想とされてきました。最近のさまざまなムーブメントによって、こうしたテーマに対する人々の意識が変化したのは明らかで、ガラスの天井を突き破る女性も出てきています。しかしながら例を挙げて指摘するならば、女性の撮影監督が初めてアカデミー賞にノミネートされたのはNetflix映画『マッドバウンド 哀しき友情』の撮影監督を務めたレイチェル・モリソンで、つい最近の2018年のことです。モリソンはニューヨーク・タイムズ紙の取材で、この栄誉について次のように語っています。「カメラが軽くなったおかげで女性の撮影監督が増えたという人もいますが、私が今まで聞いてきた話の中で最もばかばかしいと言えるでしょう。...自分が特異な存在であることに徐々に気づきましたが、それを特別視しないようにしてきました。少なくとも、特異であることを利用して大勢の中で目立とうとしたり、他の大半の人たちが持っていない手段とみなしたりしないようにしてきたつもりです」

女性をモノとして扱わない視点は、1970年代末にすでにアニエス・ヴァルダが信念として掲げていました。「カメラの後ろに立つ女性は、女性を切り刻むように撮影するタイプの男性と同じように女性を撮ることはできません」。カルト的人気を誇るヴァルダ監督は、男女のバランスがとれていると撮影現場の雰囲気の良い影響を与えると強く主張しました。「『歌う女・歌わない女』や『Réponses de femmes (原題)』の時もそうでしたが、男女混合のチームを編成するとメンバー全員がよりうまく動けるこ

とに男性陣も気づくのです。10人の女性と10人の男性がいる方が自然です。24人の若い男性が集まって、最初にスクリプターの女の子や衣装係と寝るのは誰だと悩むより、男女混合チームを組んだ方が、人が集まった時の自然な状態に戻りやすい。ですから、女性が技術者や監督になることは、みんなの利益になるわけです」。そして男女平等に関して言えば、ここにもうひとつの大きな課題があります。支配や権威、力関係を支えるメカニズムがまだ根強く残り、あまりにも頻繁に利用されている映画製作の現場で生じるハラスメント、そして性差別や性暴力を終わらせることです。

これらのテーマはすべて、「ウーマン・イン・モーション」ポッドキャストシリーズで特集されています。2019年にカンヌで開催された同プログラムの5周年を記念してスタートしたこのシリーズは、映画界のあらゆる分野で活躍する一流の女性たちの声を届けてきました。脚本家、プロデューサー、キャスティングディレクター、テーマ音楽の作曲家、セットデザイナーたちが映画界で培ってきたそれぞれのキャリア、経験、ビジョン、そして社会における女性の地位に関わるより幅広い問題について、撮影用カメラの前で、そして裏側で語っています。



ポッドキャストのエピソードを聴くことができます



# ケリングと女性

---

過去数年間は、ジェンダーの平等に関するディベートのターニングポイントとなりました。映画産業は、女性が日常的に直面する暴力や不平等に対抗する国際的な動きを促進するものとなってきました。2018年から状況が変わり始め、多くの物事が動き出し、ガラスの天井には亀裂が生じています。しかしながら、持続的かつ真にグローバルな、新しい男女平等のバランスをもたらすには、多くの活動が必要になるでしょう。そのため、ケリングは、ケリング・グループ内、芸術と文化、一般社会という3つの領域において、女性へのコミットメントを行動で表現し続けます。

## ケリングにおける女性

ケリングの女性へのコミットメントは、グループとしての最優先事項の1つです。そして、それは女性の人材育成と、男女平等に関する透明性の原則を適用することに通じます。グループはフランスのCAC40企業の内、組織のあらゆる階層で多くの女性を擁する企業の1つです（全社員の63%、マネージャーの56%、執行委員会の33%、取締役会の57%を女性が占めています）

2010年、ケリングはUN Womenと国連グローバル・コンパクトが策定した「女性のエンパワメント原則」に最初に署名した企業の一つとなりました。この行動原則に署名することで、企業は社内および社会全体での女性の地位向上を支援するというコミットメントを掲げることができます。同年、ケリングは女性が上級管理職に就きやすくするため、またより広い概念で言えばグループ内の平等な文化を促進するため、「リーダーシップ & ダイバーシティ」プログラムを開始しました。さらに、女性が経験を共有することで責任ある地位を得るためのメンタリング・プログラムや、女性向けの国際的なリーダーシップ・プログラム「EVE」への派遣など、実践的なリソースの提供も行っています。



ケリングでは、2020年1月より全社員に「ベビー・ケア休暇」を適用しています。この制度は、個人や家庭の状況にかかわらず、新しく子供を迎えたグループ内の全社員を対象に、14週間の有給休暇の取得を可能にします。世界中の全社員が同じ権利を享受でき、男女共同参画を推進するものです。

2022年、ケリングは5年連続でブルームバーグの「男女平等指数」の参加企業に選定され、また初めて同一賃金について100%のスコアを獲得しました。また、ケリングはリフィニティブ社（旧トムソン・ロイター ファイナンシャル & リスク部門）の2021年ダイバーシティ & インクルージョン・インデックスにおいて、世界の7,000社中9位となりました。

## 「ウーマン・イン・モーション」芸術と文化における女性

2015年以来、ケリングは「ウーマン・イン・モーション」プログラムを通じて、映画界に対しても取り組みを広げてきました。その目的は、映画業界に対する女性のかけがえのない貢献に光を当てることです。クリエイティビティこそが変革を生み出す最も強い力の一つであるものの、依然として男女間の不平等が顕著な、写真、アート、デザイン、ダンス、音楽の世界にも、「ウーマン・イン・モーション」プログラムは取り組みの幅を広げています。

「ウーマン・イン・モーション」アワードでは賞を通じて、各分野で活躍するインスピレーションを与えた人物を表彰し、才能ある若手女性たちに対して資金援助を行っています。また、トークイベントでは、各分野の第一線で活躍する女性たちが多様な女性の立場について意見を交換し、変化をもたらすための方法について議論する機会を提供しています。また、「ウーマン・イン・モーション」は、女性の地位向上への変革目指す様々な形態のプロジェクト（調査・研究、出版、アーカイブの活用など）を支援しています。



過去8年間、「ウーマン・イン・モーション」は芸術分野における女性の地位と評価について、考え方を変え、考察するためのプラットフォームとして選ばれてきました。

### ケリング・ファウンデーション：14年間に及ぶ、女性への暴力根絶の闘い

こうした女性への貢献は、彼女たちが日々直面する様々な暴力も対象としています。世界の女性の3人に1人が、一生においてすでに暴力の被害者であるか、今後被害者となる可能性があります。2008年以来、あらゆる文化と社会階級に存在する暴力を根絶するために、ケリング・ファウンデーションは闘ってきました。その効果を最大限高めるために、6つの国（中国、アメリカ、フランス、イタリア、メキシコ、イギリス）を対象に、厳選したいくつかのパートナーと手を取り合って活動しています。

ケリング・ファウンデーションは、暴力の被害に遭った女性のサポートを活動の中心に据えている地域団体を支援しています。また、女性への暴力を撲滅するため、特に青少年を含む若者世代に働きかけ、予防に努めています。さらに、ネットワーク内の他の団体にも、この問題に取り組むことを促しています。

またケリング・ファウンデーションは、ケリング社内や社会全体において言動を変化させていくための模索を続けています。ケリング社員に向けて家庭内暴力に対処するためのトレーニングセッションを行い、2018年にはフェイス財団と協力して、ヨーロッパ初となる性別に起因する暴力への反対活動に取り組む企業のネットワーク「One in Three Women」を創設しました。



「ウーマン・イン・モーション」に関する詳しい情報



## 映画界のアイコン的な女性たち



カンヌ国際映画祭75回の歴史において  
パルム・ドールを受賞した女性はわずか2名



ジュリア・デュクルノー 『TITANE /チタン』(2021)



ジェーン・カンピオン 『ピアノ・レッスン』(1993)  
『さらば、わが愛 覇王別姫』の陳凱歌(チェン・カイコー)監督との同時受賞



米アカデミー賞94回の歴史において  
監督賞を受賞した女性はわずか3名

ジェーン・カンピオン 『パワー・オブ・ザ・ドッグ』(2022)

クロエ・ジャオ 『ノマドランド』(2021)

キャスリン・ビグロー 『ハート・ロッカー』(2010)

監督賞にノミネートされた7名の女性：リナ・ウェルトミュラー『セブン・ビューティーズ』(1977)、ジェーン・カンピオン『ピアノ・レッスン』(1994) および『パワー・オブ・ザ・ドッグ』(2022) (ノミネートを2回受けた唯一の女性監督)、ソフィア・ Coppola『ロスト・イン・トランスレーション』(2004)、キャスリン・ビグロー『ハート・ロッカー』(2010)、グレタ・ガーウィグ『レディ・バード』(2018)、エメラルド・フェネル『プロミシング・ヤング・ウーマン』(2021)、クロエ・ジャオ『ノマドランド』(2021)



ゴールデングローブ賞79回の歴史の中で  
監督賞を受賞した3名の女性

ジェーン・カンピオン 『パワー・オブ・ザ・ドッグ』(2022)

クロエ・ジャオ 『ノマドランド』(2021)

バーブラ・ストライサンド 『愛のイェントル』(1984)



セザール賞47回の歴史の中で監督賞を  
受賞した唯一の女性

トニー・マーシャル 『エステサロン/ヴィーナス・ビューティ』(2000)

## 映画史に残る10人の影響力ある女性たち



アリス・ギイ

世界で初めての国際的な映画監督として認められているのは女性であるアリス・ギイであった。フランスの映画監督として1896年、23歳の時に世界初のフィクションムービーとされる自身初の作品『キャバツ畑の妖精』を製作し、1910年には女性初の映画製作会社 Solax Films を設立。



ジャクリーヌ・オードリー

1963年にカンヌ映画祭の審査員として選ばれた最初の女性監督。



キャサリン・ヘプバーン

アイコン的な女優として、4度のオスカーに輝いた唯一の俳優。男性俳優のオスカー最多受賞は3回である。



ロイス・ウェバー

ロイスは1915年、映画『偽善者』で、ヌードシーンを描いた初の監督とされる一人である。1917年に自身の映画製作会社を設立。



ジェーン・カンピオン

ニュージーランド出身。1993年に『ピアノ・レッスン』で女性として初めてパルム・ドールを受賞。(ジュリア・デュクルノーが2021年に『TITANE /チタン』で同賞を受賞するまで唯一の女性受賞者だった)。オスカーでは監督賞に2回ノミネートされた唯一の女性であり、アカデミー賞94回の歴史において、監督賞を受賞した3名の女性の内の一人でもある。



ドロシー・アズナー

1940年代のハリウッドで活躍した数少ない女性監督の一人。



オリヴィア・デ・ハヴィランド

ハリウッドの黄金期の代表的な存在。自立した女性として、映画会社の曖昧な契約から俳優を保護する重要な法律改正の決定に携わった。1965年、女性初のカンヌ映画祭審査員長を務めた。



アニエス・ヴァルダ

ヌーヴェル・ヴァーグの巨匠。社会そしてジェンダー問題を取り上げた監督であり、女性として初めて2017年に米アカデミー名誉賞が授与された。



アイダ・ルピノ

アイダ・ルピノは女優、且つ映画監督であり、1950年代にはプロデューサー、脚本家としても活躍。社会問題や道徳的なタブーを取り上げた。



クロエ・ジャオ

アメリカ在住の中国人脚本家・監督で、映画史において性別問わず最も多くの監督賞を受賞。

## 映画における女性（ハリウッド）

### スクリーン上の女性たち

ベクデル・テスト(1)は1985年にアリソン・ベクデルによって実施され、映画における女性の演じる役割を分析。

ベクデル・テストにパスする為の3つの基準

1

少なくとも2人の女性が登場している映画であること

2

女性同士の会話があるかどうか...

3

男性に関する話題以外が出てくること

1995年から2021年、テストの対象となった6,000の映画のうち、  
38%の映画がベクデル・テストの3つの基準を満たしていなかった

2019年、ヒット映画上位100作品のうち、有色人種の女性が主演・共演者として起用されたのはわずか17作  
45歳以上の女性が主演・共演者として起用されたのはわずか3%

### カメラの後ろにいる女性たち

2021年、ヒット映画上位100作品のうち、女性は

監督の12% プロデューサーの24% 脚本家の16%

男性のみが映画の監督・脚本を務めた作品では

主演の19%が女性

女性が一人でも監督や脚本を務めた作品では

主演の57%が女性

2006年から2021年公開作品を手掛けた、1,542人の映画監督のうち、  
わずか5.4%が女性(3)

## 映画における女性（フランス）

### スクリーン上の女性たち

2019年(8)

資金調達額が最も多かった49作品のうち、  
52%がベクデル・テストの3つの基準を満たしていなかった  
主要な女性登場人物のうち、有色人種の女性はわずか6%  
50歳以上の主要な登場人物のうち、女性はわずか28%

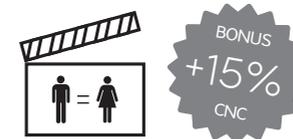
### カメラの後ろにいる女性たち

2020年(6)



フランス国立映画映像センター(CNC)に登録された映画239作品のうち、  
女性が手掛けたのは25%  
この割合は2011年よりほぼ変化していない

2019年以来(7)

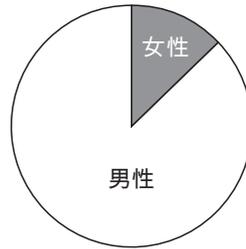


CNCは、資金面で支援している映画のうち、  
制作チームの男女比が均衡している作品に対して  
15%の男女平等ボーナスを支給

## 映画における女性(日本)

### 日本映画における女性たち(9)

2021年封切の  
日本映画における  
女性監督の割合はわずか **13.3%**



### 2021年 興収10億円以上を記録した日本映画

女性監督作  
**3**本

VS

男性監督作  
**26**本

年	興収10億円以上を記録した日本映画			日本映画全体	
	作品数	女性監督作	女性主演作	作品数	女性監督作
2017	39	0 (0%)	13 (33.3%)	517	52 (10.1%)
2018	29	1 (3.5%)	17 (58.6%)	530	48 (9.1%)
2019	42	3 (7.1%)	17 (40.5%)	605	57 (9.4%)
2020	21	0 (0%)	10 (47.6%)	458	56 (12.2%)
2021	29	3 (10.3%)	16 (55.2%)	458	61 (13.3%)
5年間計	160	7 (4.4%)	75 (45.5%)	2568	274 (10.7%)

(注1)  
(注2)

## 日本映画大手4社の現状(10)

2017年~2021年に公開された  
実写邦画320作品を対象

女性監督 **3.7%**

女性脚本家 **24.9%**

女性主演 **30.1%**

	女性監督				
	東宝	東映	松竹	KADO KAWA	4社 計
2017	0.0% (0/28)	0.0% (0/16)	0.0% (0/21)	20.0% (2/10)	2.7% (2/75)
2018	4.2% (1/24)	5.0% (1/20)	0.0% (0/15)	12.5% (1/8)	4.5% (3/67)
2019	0.0% (0/16)	4.0% (1/25)	5.9% (1/17)	16.7% (2/12)	5.7% (4/70)
2020	0.0% (0/19)	5.3% (1/19)	0.0% (0/9)	10.0% (1/10)	3.5% (2/57)
2021	0.0% (0/15)	5.0% (1/20)	0.0% (0/13)	0.0% (0/9)	1.8% (1/57)
5年間 計	1.0% (1/102)	4.0% (4/100)	1.3% (1/75)	12.2% (6/49)	<b>3.7%</b> (12/326)

	女性脚本家				
	東宝	東映	松竹	KADO KAWA	4社 計
2017	27.3% (9/33)	25.0% (4/16)	21.9% (7/32)	38.5% (5/13)	26.6% (25/94)
2018	32.1% (9/28)	35.0% (7/20)	27.3% (6/22)	22.2% (2/9)	30.4% (24/79)
2019	26.3% (5/19)	17.2% (5/29)	16.7% (3/18)	17.6% (3/17)	19.3% (16/83)
2020	23.8% (5/21)	11.5% (3/26)	33.3% (5/15)	30.0% (3/10)	22.2% (16/72)
2021	20.0% (4/20)	27.3% (6/22)	20.0% (3/15)	50.0% (4/8)	26.2% (17/65)
5年間 計	26.4% (32/121)	22.1% (25/113)	23.5% (24/102)	29.8% (17/57)	<b>24.9%</b> (98/393)

(注3)~(注5)

	女性主演				
	東宝	東映	松竹	KADO KAWA	4社 計
2017	25.7% (9/35)	26.1% (6/23)	34.6% (9/26)	53.3% (8/15)	32.3% (32/99)
2018	41.2% (14/34)	14.3% (4/28)	37.5% (9/24)	40.0% (4/10)	32.3% (31/96)
2019	35.0% (7/20)	12.5% (4/32)	15.8% (3/19)	42.9% (6/14)	23.5% (20/85)
2020	41.9% (13/31)	22.7% (5/22)	30.0% (3/10)	54.5% (6/11)	36.5% (27/74)
2021	21.7% (5/23)	33.3% (8/24)	6.7% (1/15)	41.7% (5/12)	25.7% (19/74)
5年間 計	33.6% (48/143)	20.9% (27/129)	26.6% (25/94)	46.8% (29/62)	<b>30.1%</b> (129/428)

## 映画賞における女性(11)

日本アカデミー賞において  
1978年~(45回中)

最優秀作品賞あるいは  
最優秀監督賞を受賞した女性 **0**人

ブルーリボン賞において 1950年~(64回中)

ブルーリボン賞を  
受賞した女性 **1**人 **2**人(4作品)  
作品賞 監督賞

## 東京国際映画祭における女性

2016年～2022年(12)

審査員における女性の割合は **33%**

※2020年(第33回)は、コンペティション部門開催なしのため審査員なし

2016年(第30回)～2022年(第35回) 公式上映作品における監督の男女比

単位:本

	作品数	男性	女性	男女	女性&男女 監督作の割合	女性監督作の 割合
第30回	203	178	21	4	12.3%	10.3%
第31回	171	138	29	4	19.3%	17.0%
第32回	170	145	17	8	14.7%	10.0%
第33回	118	101	15	2	14.4%	12.7%
第34回	117	86	29	2	26.5%	24.8%
第35回	125	108	15	1	12.8%	12.0%

コンペティション部門選出作品における監督の男女比

	作品数	男性	女性	男女	女性&男女 監督作の割合	女性監督作の 割合
第30回	15	11	3	1	26.7%	20.0%
第31回	16	15	1	0	6.3%	6.3%
第32回	14	12	2	0	14.3%	14.3%
第33回	1	0	1	0	100.0%	100.0%
第34回	10	6	3	1	40.0%	30.0%
第35回	15	12	3	0	20.0%	20.0%

※全体数は、オムニバス作品を個々の作品として扱っている  
 ※第33回は、コンペティション開催なし、観客賞のみ1作品を選出  
 ※第35回は、9月30日時点での公式上映作品数

## 東京国際映画祭における女性



最高作品賞、監督賞を受賞した女性の数  
 ～2021年(全33回中)(13)

最高作品賞 **3**人

1997年東京グランプリ:  
『ビヨンド・サイレンス』

カロリーヌ・リンク 監督

(『パーフェクト サークル』  
アデミル・ケノヴィッチ監督との  
同時受賞)

2012年東京サクラグランプリ:  
『もうひとりの息子』

ロレーヌ・レヴィ 監督

2021年東京グランプリ:  
『ヴェラは海の夢を見る』

カルトリナ・クラスニチ 監督

監督賞 **5**人

1987年  
最優秀監督賞:  
ラナ・ゴゴベリーゼ  
『転回』

1999年  
最優秀監督賞:  
マーサ・ファインズ  
『オネーギン』

2006年  
最優秀監督賞:  
ヴァレリー・ファリス  
『リトル・ミス・サンシャイン』  
(ジョナサン・デイトンとの  
共同監督)

2012年  
最優秀監督賞:  
ロレーヌ・レヴィ  
『もうひとりの息子』

2016年  
最優秀監督賞:  
ハナ・ユシツチ  
『私に構わないで』

※第33回はコンペティション部門開催なし

## 参考文献

---

(1) Bechdel Test website: <http://bechdeltest.com/>

(2) Annenberg Inclusion Initiative, Inequality across 1300 Popular Films: Examining Portrayals of Gender, Race/Ethnicity, LGBTQ & Disability from 2007 to 2019.

Source: [https://assets.uscannenberg.org/docs/aii-inequality\\_1300\\_popular\\_films\\_09-08-2020.pdf](https://assets.uscannenberg.org/docs/aii-inequality_1300_popular_films_09-08-2020.pdf)

(3) Annenberg Inclusion Initiative, Inclusion in the Director' s Chair: Analysis of Director Gender & Race/Ethnicity Across 1,500 Top Films from 2007 to 2021.

Source: <https://assets.uscannenberg.org/docs/aii-inclusion-directors-chair-2022.pdf>

(4) Dr. Martha M. Lauzen, It' s a Man' s (Celluloid) World, Even in a Pandemic Year: Portrayals of Female Characters in the Top U.S. Films of 2021, Center for the Study of Women in Television and Film, San Diego State University.

Source: <https://womenintvfilm.sdsu.edu/wp-content/uploads/2022/03/2021-Its-a-Mans-Celluloid-World-Report.pdf>

(5) Dr. Martha M. Lauzen, The Celluloid Ceiling in a Pandemic Year: Employment of Women on the Top U.S. Films of 2021, Center for the Study of Women in Television and Film, San Diego State University.

Source: <https://womenintvfilm.sdsu.edu/wp-content/uploads/2022/01/2021-Celluloid-Ceiling-Report.pdf>

(6) Les principaux chiffres du cinéma en 2020, 2021, CNC.

Source: <https://www.cnc.fr/documents/36995/153434/Les-principaux-chiffres-cles-du-cinema-2020.pdf/ae6081ec-3e09-9346-790f-f139d1a8651c?t=1622560799742>

(7) Parité : actions et bilan 2021 du CNC, 2021, CNC.

Source: <https://www.cnc.fr/documents/36995/153434/Parit%C3%A9+Actions+et+bilan+2021+du+CNC.pdf/955f0a27-ec15-5778-b2a2-fce0ba3108da?t=1637077531811>

(8) Collectif 50/50. Cinégalités : qui peuple le cinéma français ?, 2022.

Source: <https://collectif5050.com/files/etudes/2022/02/Cinegalite-s-Rapport.pdf>

(9) (10) 日本大学芸術学部映画学科古賀ゼミ調べ

参考データ:「映画 DB」(運営:株式会社キネマ旬報社)ほか

※「映画 DB」封切映画一覧表で“日本映画”に分類されている作品を対象に集計(デジタルコンテンツ・ODS(非映画コンテンツ)、成人映画を除く)

※興収10億円以上作品は、日本映画製作者連盟発表の日本映画産業統計に掲載されている作品のうち、「映画 DB」上で“日本映画”に該当するもの

注1:女性監督作は女性監督を含む作品数

注2:女性主演作は女性主演を含む作品数

注3:共同配給作品は、各社の配給作品として算入

注4:監督・脚本家・主演のうち、それぞれ複数の場合は人数分算入

注5:作品数には、対象者の情報もしくは性別が不詳・非公開の一部作品を含む

(11) ケリング ジャパン調べ

(12) (13) 東京国際映画祭事務局調べ

LE FIGARO

madame  
FIGARO

VARIETY

プレスお問い合わせ

Émilie Gargatte, Head of Press Relations  
+33 6 14 53 50 90 / emilie.gargatte@kering.com  
Eva Dalla Venezia, Cultural Press Relations Manager  
+33 6 45 82 64 92 / eva.dallavenezia@kering.com

2022年カンヌ国際映画祭に関して  
Laurent Boyé, Americas and UK Press Relations  
+1 310 220 72 39 / laurent@jazopr.com  
Viviana Andriani, France Press Relations  
+33 6 80 16 81 39 / viviana@rv-press.com

パートナーシップに関して  
Bérengère Gaucher, Image Director  
+33 6 21 76 23 32 / berengere.gaucher@kering.com

日本でのお問い合わせ先  
ケリング ジャパン コミュニケーション&メディア  
産形 利恵 / rie.ubukata@kering.com  
田村 絵李 / eri.tamura@kering.com

高解像度の画像や動画、図表などの資料はこちら  
[Kering.com](https://www.kering.com)



Follow the official hashtags  
#WomenInMotion  
#Kering

K E R I N G

